

2002年度国際交流活動について

人文学研究所所長 鈴木 陽 一

1 基本方針と行動計画

昨年の総会で承認を得た国際交流活動の基本方針は、以下のようなものであった。

2001年11月、本学におけるシンポジウム「歴史と文学の境界」が成功裏に実現したことを踏まえ、従来の浙江大学というパートナーとの関係を大事にしつつ、更に国際交流を充実、発展させること、具体的には、人文学研究所が東アジアに於ける学術交流の重要な拠点となりうるようなネットワークの可能性を探ることを目標とする。

こうした方針に基づき、今年度は浙江大学も含め、中国、香港、台湾の複数の研究期間を訪問し、2003年度以降の学術交流の道を開拓することとした。

2 活動報告

2-1 期間

2002年11月5日－11月18日

2-2 訪問した研究機関

台湾／中央研究院の中山人文社会学研究所、台湾大学、台北師範学院、淡江大学

香港／香港大学の亜細亜研究センター、日本研究所、香港Public Record Office、香港歴史博物館

上海／社会科学院歴史研究所、華東師範大学、華東理工大学、上海師範大学

杭州／浙江大学日本文化研究所、同中文系

2-3 台湾での意見交換

11月5日 台北到着 PM8:00 台湾大学／王泰昇 教授 (1)

11月6日 中央研究院／近代史研究所／档案館／中山人文社会科学研究所／湯熙勇 教授 (2)

11月7日 淡江大学／日本学科・日本研究所／馬耀輝 教授 (3)

(1) 王泰昇教授 (国立台湾大学・法学部)

2002年、10月16日～17日、中京大学で開催されたシンポジウムで「台湾の近代と日本」で王氏の「台湾総督府法院文書目録の編纂」という報告を孫委員が聞き、急遽、意見交換を申し出た。王氏の研究は、1895年11月20日に軍事命令「台湾総督府法院職制」により成立した「台湾総督府法院」が所蔵した裁判判決原文 (1895～1945年10月24日までの文書、1998年以降、本格的に発掘された) に関するものである。

① 刑事・民事などの裁判判決原文に関する研究は、今後、歴史学、社会学、経済学などの幅広い分野との共同作業を必要とする。

② さらに、同じ判決原本が朝鮮総督府、満州国、中国華北の占領地、香港などの旧「大日本帝国」の勢力範囲であった地域に残されている可能性も否定できない。中国史／朝鮮史などとの共同研究も可能。

③ 王氏自身もこの点において共同研究の可能性を追求したいと考えている。

(2) 湯熙勇研究員（中央研究院・中山人文社会科学研究所）

旧三民主義研究所。国民党政権から民進党への政権交代によって「三民主義」を冠したさまざまな研究機関の名称は変更を余儀なくされた。ただし、これは政治上の理由にすぎないもので、それぞれの研究所に優秀な人材が集まっていることに変わりはない。現在の中山人文社会科学研究所が推進している研究プロジェクトは

- ① 環中国海プロジェクト
- ② アジア太平洋地区プロジェクト
- ③ 海難事故プロジェクト
- ④ 移民と華僑プロジェクト

湯氏が中心となる研究はいずれも「海洋」との関連を視野にいたったもので神奈川大学／人文科学研究所の共同研究（山口建治代表：環シナ海伝承文化の研究）や常民文化研究所とも共通性がある。中山人文社会科学研究所は中央研究院の台湾史研究所、近代史研究所とも密接な協力関係を維持している。

(3) 馬耀輝教授（淡江大学・日本語文学系）

淡江大学の学生総数は約2万名。馬氏は日本語学科所属でありながら、日本研究所の研究員でもある。日本語学科は一学年60名、4年までに1年間、麗澤大学へ学生を派遣する提携関係をもっている。麗澤大学も淡江大学との交流を重視し、淡江大学に専用の寄宿舍をつくり、日本から学生を派遣している。そのほかに橘女子大学、早稲田大学と交換留学生制度を設けている。学部のほか、日本研究所は修士と博士課程の教育機関で主なテーマは日本研究全般である。

☆蔡琴教授（台湾における神社研究）が歴史学部にも所属。

淡江大学には日本語学科のほかにロシア語学科／スペイン語学科がある。また、外国語教育に関連するシンポジウムを、中国・台湾の外国語学部をもつ複数の大学が持ち回りで毎年開催している。

2-4 香港での意見交換

- 11月7日 香港到着 香港大学／日本学科／王向華 教授（1）
- 11月8日 香港大学／アジア研究センター／李培徳 教授（2） 香港大学図書館見学
- 11月9日 香港歴史檔案館（Public Record Office of HongKong）、香港歴史博物館を見学

(1) 王向華教授（香港大学・日本学科）

専門は香港のポップカルチュア。現代香港の日本文化流入などについて研究。日本語学科はとくに日本との交流に積極的。交流の開始はまず、教員の交換派遣から始めたいという提案があった。

教員の交換派遣から、学生の交換派遣へと発展させたい、短い期間であれ、いつでも歓迎する、学校の宿泊施設や研究室などの提供も可能ということであった。

オックスフォードで社会人類学のPh.D.をとったときは、香港に進出した日系企業（具体的にはヤオハン）における日本人管理職と現地スタッフ（香港人従業員）との間の組織内コミュニケーションの様態（企業文化）に関する社会人類学的研究などがある。

王氏の主著：Japanese Bosses, Chinese Workers: Power and Control in a Hong Kong Megastore (Univ. of Hawaii Press ; Anthropology of Asia Series, 1999)。

主な日本語論文：「香港の日系スーパーマーケットの組織文化」（『香港社会の人類学——総括と展望』風響社、1997）、「香港の日系スーパーマーケットの現地従業員」（『中原と周辺——人類学的フィールドからの視点』風響社、1999）等。

(2) 李培徳（香港大学・アジア研究センター）

アジア研究センターのコアメンバーは社会学，香港史，東南アジア2名に李氏の5名。センター Fellow（兼任）メンバーが30名おり，そのほか職員が15名程度いる。主な研究プロジェクトは，

- ① 現代香港の研究，
- ② 1945年以前の香港の研究，
- ③ 東南アジア研究プロジェクト，
- ④ アジアの都市プロジェクト，
- ⑤ 東北アジア（韓国を含む）の研究を準備中

李氏自身の研究テーマは「香港の日本人研究」である。

香港大学・アジアセンターと日本のパートナーになっている組織はアジア研究所。ほかに東京大学東洋文化研究所と協力関係をもつ。

来年の3月にミッションスクールに関する大規模なシンポジウムが計画されている。

(3) 香港歴史档案馆について（香港 Public Record Office）

香港特別行政区政府の政府档案処が管轄する歴史档案馆は1997年に建築が完成。香港歴史档案馆の主な機能は，档案の鑑定と整理，档案の保護と修理，档案の公開と提供という三つの機能である。

歴史档案馆が所蔵する資料のなかでもとくに重要なものは

- ① 土地調査や土地契約・税に関連する文書群。1846年－1975年の官有地契約関連文書は，不動産など研究は勿論，契約関係などを眺めるときの極めて有効な資料である。また，法院と法律事務に関連する档案が保存されていることも特筆しなければならない。
- ② 戦時档案－歴史档案馆は日本占領時期の香港の行政，軍事などに関する膨大な資料を所蔵している。日本側の行政機関が取り交わした各種の土地契約関係の文書は勿論，イギリスが日本に行政権を渡すときに作成された文書，戦争捕虜の人名録や待遇に関する記録などが重要。
- ③ 歴史档案馆はイギリスのPROからCO129（1841－1951年の期間中香港政庁とイギリス本国との間で往復された公文）を購入している

今回，閲覧したのは主に日本占領期の香港に関する新聞記事について。アーキビストのJonathan氏が『星島日報』のほかに『華僑日報』と『The Hong Kong News』という新聞が日本占領期の香港で最も広く読まれた新聞であることを紹介してくれた。

新聞の一部を申請し，閲覧，複写をとる一連の過程を確認したが，スムーズな進行。短い期間でも確実に連絡をとることで大きな成果を上げることが可能と思われる。

『The Hong Kong News』の「Radio Hong Kong」という欄を複写。Call SignはJ PHA。7時30分に放送開始，10時40分に放送終了であったことが分った。そのほかに，『香港華僑日報』も一部「本社成立宣言」を複写。

2-5 上海での意見交換 part 1

11月10日 上海／華東師範大学／易恵利 教授 華東理工大学／喻 Huikang 教授

11月11日 孫，東京へ。鈴木，杭州へ

上海での意見交換は華東師範大学の易恵利教授，華東理工大学の喻 Huikang 教授，そして，本学教授で在外研究中の大里浩秋が参加して意見を交換した。最近の中国の大学では国際交流を積極的に進めており，華東師範大学と華東理工大学も神奈川大学との交流を進めることには基本的には賛成であるが，対外交流を担当する部署との意見調整が必要という現在の状況を相互が確認した。た

だし、外事弁工室などの部局を経由しない、研究所や学部間の交流（雑誌交換や学術情報の交換など）は速やかに実践したいとのことであった。

2-6 杭州での意見交換と調査活動

- 11月11日 浙江大学日本文化研究所において以下のメンバーと鈴木の間で交流問題を話し合った。
所長 王勇教授 副所長 王宝平教授 呂順長助教授
中文系 金健人教授
- 11月11日 富陽市龍門鎮（三国時代呉の孫權の子孫が住むとされる伝統的住居群）の調査
- 11月13日 建徳市梅城鎮で、「白蛇伝」関連の民間伝承を調査。
- 11月14日 日本文化研究所において交流について再度話し合い。

(1) 基本方針の確認

- ① 神奈川大学人文学研究所と浙江大学日本文化研究所は、今後とも信頼すべきパートナーとして学術交流を継続する。
- ② 交流は平等互惠とする。旅費のうち渡航費は渡航する側の自己負担、滞在費の主たる部分は受け入れ側の負担とする。
- ③ それぞれが国際的な学術活動を企画する際には、必ず相手方に連絡し、協力して実施する。

(2) 来年度の交流について

- ① 人文学研究所より来年度開催予定のシンポジウムについて、また日本文化研究所より来年度開催予定のシンポジウムについて、それぞれ説明を行った。双方はそれらの主旨に賛同し、全面的に協力する旨を確認した。
- ② 来年度開催のシンポジウムにどの程度の人数を派遣するかについては、今後、計画の具体化に伴って検討していくこととした。
- ③ 来年度は、浙江大学が日本開催のシンポジウムに参加する順になること、その場合、派遣者数は過去に比べて減少させること、ただし、両研究所の学術交流が継続していることが明らかな規模の参加者数であるべきことを双方が確認した。
- ④ 中国の他の大学からシンポジウムへの参加者を招請する場合、浙江大学をキーステーションとして、人員の組織化がなされるよう浙江大学から要請があり、これを了承した。とりわけ、「環中国海の文化交流」については浙江大学の協力が不可欠であるということを確認した。
- ⑤ 浙江大学より、来年の五月、副学長及、王勇日本文化研究所所長、張夢新共産党書記が大阪の四天王寺国際仏教大学を公式訪問する予定であることが報告された。その際、神奈川大学を訪問したいという意向であること、そのことを人文学研究所より予め国際交流センターに伝えておくことが確認された。

(3) 学術調査

省略

2-7 上海での意見交換 part 2

11月15日～17日 上海師範大学において、社会科学学院、上海師範大学共催「第二回中国古典小説国際シンポジウム」に参加し、上海師範大学人文学院院长孫遜氏と学術交流について話し合った。

上海師範大学との学術交流についての確認事項は以下の通りである。

- ① 刊行物，研究情報の交換を行う。
- ② 双方が行うシンポジウム等の国際学術交流については，可能な限り協力する。
- ③ 国際交流に当たっては平等互惠を原則とする。

3 2003年度に向けて

以上のような活動を通じて，本研究所は新たにアジアの各地域の研究機関とのネットワーク造りのための第一歩を踏み出すことができた。この成果を踏まえ，2003年度の国際学術交流は更に実りあるものとなるよう，複数のシンポジウムを計画し，予算案の申請を行った。

4 補

2003年2月，上海師範大学より，上海を中心とした都市研究について，シンポジウム（2003年6月開催）への参加と，2004年以降，シンポジウム共催の呼びかけがあった。